新設授業科目　授業記録

開講科目名： 研究プロポーザル演習	科目群名【 研究マネジメント 】
担当教員名：瀬渡章子・吉田容子	開講学期・曜日・時限【 通年不定期 】

第 1 回授業実施日 **【 4 月 13 日】**	
① 本時のねらい	イニシアティブ新設科目としての本授業の位置づけを明確にし、授業目標や授業内容・進め方を、受講学生に周知させる。
② 本時の内容	担当教員および受講学生の自己紹介。 本授業の目標を、研究助成金や就職への応募申請書類作成の方法を学ぶこと、また、研究や教育について女性研究者の立場から考えることである旨、説明した。
③ 本時の成果	受講学生全体に、本授業に積極的に取り組もうとする姿勢がみられた。
④ 自己評価	博士後期課程に入学して間もない受講学生に、研究に対する意識を持たせることができた。

第 2 回授業実施日 **【 5 月 30 日】**	
① 本時のねらい	受講学生に対し、実際に応募可能な各種助成金の情報を与えるとともに、応募申請書類の作成方法を身につけさせる。
② 本時の内容	大学院生時に応募可能な研究助成（民間団体を含む）について紹介した後、本授業では、主として、日本学術振興財団の特別研究員への応募申請書類の作成を扱うこととした。担当教員（瀬渡・吉田）が過去に採択された科研費申請書類を受講学生に配布し、これをサンプルに申請書類の書き方を紹介した。 ＜配布資料：①日本学術振興会 特別研究員 応募申請書類一式　②担当教員（瀬渡・吉田）が過去に採択された科研費申請書類＞
③ 本時の成果	大学院生時から応募可能な研究助成があることを知らない受講学生が何人かおり、こうした学生に対して研究助成金獲得の機会があるという情報を提供することによって、研究への意欲を促すことができた。
④ 自己評価	過去に日本学術振興会の特別研究員に採択された申請書が担当教員の手元になく、応募申請書類作成のサンプルとして、担当教員の過去に採択された科研費申請書を使用した。具体的な説明をする上では、やはり特別研究員の申請書をサンプルとすべきであった。

第 3 回授業実施日 **【 7　月 11　日】**	
① 本時のねらい	女性研究者として研究職をめざすには、大学院生時代の研究生活をどのように送ったらよいのか、また、研究職に応募してから採用まで、どのようなプロセスを辿るのか。研究職への道を具体的に紹介する。
② 本時の内容	本学大学院博士後期課程において学位を取得し、現在は、神戸女子大学家政学部専任講師の梶木典子先生にゲストスピーカーでお越しいただいた。大学院時代の研究生活や、研究職へのアプライ、私立大学における教員の仕事などについて、具体的にお話し下さった。この後、受講学生から質問や感想が出され、それらをもとに全体でディスカッションを行った。
③ 本時の成果	研究職にはどのようにしたら就くことができるのか、受講学生にとっては未知のことであったようだが、ゲストスピーカーの詳細な説明によって、専門の講義では取り扱われない情報が学生に与えられた。 ＜本時の内容に関する小レポートを，課題として提出させた＞
④ 自己評価	ゲストスピーカーに本学大学院修了生をお願いしたことで、受講学生はより身近な存在として話を聞くことができたようで、効果的な授業であった。
第 4 回授業実施日 **【 10　月 13　日】**	
① 本時のねらい	前回の授業に引き続き、女性研究者として研究職をめざすには、大学院生時代の研究生活をどのように送ったらよいのか、また、研究職に応募してから採用まで、どのようなプロセスがあるのか。研究職への道を具体的に紹介する。
② 本時の内容	本学大学院前期博士課程で修士号を取得し、現在、名古屋学芸大学ヒューマンケア学部研究助手の林麗子さんに、ゲストスピーカーをお願いした。林さんは、本授業の受講学生でもある。現在の大学に研究助手として採用された経緯や、研究助手の仕事の紹介などを交え、研究者としてのやりがいや、ジレンマなどについて語っていただいた。この後、受講学生から質問や感想が出され、それらをもとに全体でディスカッションを行った。
③ 本時の成果	本授業の受講学生の一人で、すでに研究助手として大学に籍を置いている林さんの存在は、先回のゲストスピーカーである梶木先生以上に受講学生にとっては身近であったようだ。そのためか、全体ディスカッションのさいには、自主的に林さんが司会役をつとめるかたちになり、受講学生から多数発言が出て、活発な意見交換が行われた。 ＜本時の内容に関する小レポートを，課題として提出させた＞
④ 自己評価	受講学生にとって、身近な存在から話を聞くことは、教員が予想する以上に効果的であった。

第 5 回授業実施日 **【　11　月 8　日】**	
① 本時のねらい	前回の授業に引き続き、女性研究者として研究職をめざすには、大学院生時代の研究生活をどのように送ったらよいのか、また、研究職に応募してから採用まで、どのようなプロセスがあるのか。研究職への道を具体的に紹介する。さらに、大学院時代に研究助成に応募・採択されることが、その後の研究職への採用にプラスに影響することを、受講学生に具体的に知らせる。
② 本時の内容	本学大学院博士後期課程において学位を取得し、現在は、追手門学院大学文学部専任講師の筒井由起乃先生にゲストスピーカーでお越しいただいた。筒井先生は大学院生時代に日本学術振興会特別研究員に採用されており、研究助成への応募や、海外留学のための奨学金制度などを積極的に利用するメリットについてお話下さった。また、こうした助成金を獲得して、ご専門の研究のためベトナムに長期フィールドワークに出られたご経験などを中心に、現在の研究基盤が大学院生時代に築かれたものであることを語って下さった。
③ 本時の成果	日本学術振興会特別研究員の採用は、非常に狭き門であるが、実際に本学大学院生時代に採用された経験を持つ筒井先生のお話を聞いて、受講学生も挑戦する勇気を持ったように見受けられた。 ＜本時の内容に関する小レポートを，課題として提出させた＞
④ 自己評価	前回（10 月 13 日）に比べ、全体のディスカッションで意見交換が活発に行われなかったので、担当教員が話題提供に努めるべきであった。
第 6 回授業実施日 **【　12 月 22　日】**	
① 本時のねらい	研究助成金への申請応募書類作成の方法を実践的に身につけることが、本授業の目標の一つである。そこで本時では、受講学生にあらかじめ作成するよう課題としておいた日本学術振興会特別研究員への応募申請書類について講評を行い、書類作成の方法を実践的に学ばせる。
② 本時の内容	受講学生が作成して、あらかじめ教員に提出した申請書類について、受講学生一人ずつに対して教員側から講評を行った。
③ 本時の成果	受講学生はこうした申請書類の作成ははじめてであったため、申請書類の紙面を埋められない者もいたが、教員側から具体的なアドバイスをすることにより、申請書類の各項目について何をどのように記載したらよいか理解できたようである。本時のアドバイスを参考に再度検討・修正のうえ、1 月 26 日までに申請書類を完成させ、教員に提出するよう指示した。
④ 自己評価	担当教員と受講学生の専攻分野が異なるため、研究内容に関するアドバイスはすることができなかったが、実際の審査のさい、読み手にわかりやすい申請書を作成する方法について、教員の経験をもとにアドバイスができたと思う。 年齢が上のため、日本学術振興会の特別研究員に応募できない受講学生がいた。民間団体も含め、応募可能な研究助成について、広く情報を収集する必要があった。